

ヘルシンキを訪ねてーフィンランドの演劇散策

大林のり子（浅井学園大学短期大学部）

この夏、初めて北欧を訪れた。近代以後の演劇史では、北欧はヘンリック・イブセン（一八二八―一九〇六、ノルウェー）やアウグスト・ストリンドベリ（一八四九―一九二二、スウェーデン）など近代を代表する劇作家を生んだ地域として記憶されている。また、二十世紀前半に絵画や映画、演劇などの分野で展開されたドイツ表現主義は、画家エドヴァルド・ムンク（一八六三―一九四四、ノルウェー）の影響を抜きに語ることはできない。そして近年私が研究対象としてきた演出家マックス・ラインハルト（一八七三―一九四三、オーストリア）についていえば、ベルリンで活躍した時期に、前に挙げた人々あるいはその作品と深く関わった。また彼はヨーロッパ各地を巡る地方公演の一環として、北欧諸国にも訪問していた。つまり、少なくとも私にとって北欧は演劇史の重要な一部をなす地域であったといつていい。ちなみに二〇〇六年はイブセン没後百年を記念したイベントが各地で行なわれた年でもあった。

しかし、今列挙した北欧は、あくまでもノルウェーでありスウェーデンである。私が今度訪ねたのは北欧といってもフィン

ランドのヘルシンキ。旅行会社の言葉を借りれば、日本から一番近いヨーロッパなのだそうだが、そのフィンランドの演劇について、訪問するまでほとんど知識は皆無の状態だった。むしろフィンランドといえば、ムーミンの国、オーロラの国、サンタクロースの国、そして北欧デザインと福祉先進国。つまり私には観光客の知識以上のものはなかったのだった。

* * *

ヘルシンキ訪問のきっかけは二〇〇六年八月七日（十二日）にヘルシンキ大学で開催された国際演劇学会、通称FIIRT (International Federation for Theatre Research) の四年に一度の世界大会(Congress)である。この学会への参加も初めてだったので、訪問中のほとんどの時間は学会のスケジュールに合わせ会場周辺で過ごすことになった。

ヘルシンキはこじんまりした街で、美術館や劇場をはじめ、ショッピング街も、市場が立ちクルーズ船がひしめく港なども徒歩圏内にある。短い夏はとても爽やかな気候で、夜は十時ごろまで明るい。散策に最適な条件にも恵まれ、一週間ほどの滞

在はとてもゆったりとしたものになった。

学会の年次大会 (Annual conference) は毎年場所を変えて世界各国の都市で開催される。八月に開催されることは珍しく、たとえば過去には、アメリカのワシントン (二〇〇五年六月二十六日～七月一日)、ロシアのサンクトペテルブルグ (二〇〇四年五月二十二日～二十七日)、インドのジャイプール (二〇〇三年一月四日～十日) で行われた。また、来年は南アフリカ共和国 (二〇〇七年七月十日～十四日) の開催が決定している。今回は八月に開催されたこともあり、日本人研究者の参加が例年よりも多かったようだ。

一週間ほどの会期中には世界各国から三百人を越える参加者がある。連日、朝九時から夕方六時まで、午前中は大会議室で全体のテーマに関わるシンポジウム、午後には同時に八つの部屋で研究発表やパネルセッションなどが行われる。今回の学会テーマは「グローバル対ローカル (Global VS Local)」。幅があるテーマだけに、議論の難しい側面もあった。また国際的な場だからこそ、歴史や文化の違いから議論が平行線になるという場面も見られた。とはいえ、国境を越えて問題を共有することの難しさを感じると同時に、あらためて気づかされる新たな問題点も発見できたように思う。

昼の部が終わると、夜はヘルシンキ市内の芸術文化関連施設で行われるレセプションや劇場ツアーなどが準備されており、希望に応じて参加することができる。たとえばレセプションや

晩餐会の会場になったのは、演劇博物館、演劇学校、シティ・ホール、マリーナ・コングレス・センターなどで、後で取り上げる演劇学校は、二日目に開かれた懇親会の会場になっていた。観劇ツアーの方は、八月は基本的に劇場がシーズンオフのため、主要な劇場の公演は見られないという。代わりに、学会で企画されたアメリカのパフォーマー、ロイス・ウィーバーが現代美術館内のキアズマ劇場でパフォーマンスを行なったのを始めとして、港から船に乗って沿岸に浮かぶ島々で催される野外劇を見に行くツアー、他にフィンランド国立劇場の公演、実験的な短い演劇のオムニバス上演などがリストアップされていた。また懇親会で訪れた演劇学校でも、学生たちによるパフォーマンスが二つ用意されていた。一つはフィンランド語で上演される不条理劇、もうひとつはダンスパフォーマンスだった。

* * *

学会に参加中、あるフィンランド人が「劇場は、正しいフィンランド語を保存し、伝えるという重要な役割を担っている」という意味のことを話しているのを聞いた。特に目新しい意見ではなかったが、日頃私が見聞きしている現代の演劇観とは何か異なるものに感じられ、その言葉が心に残った。ほとんどフィンランドについて知識のない私の頭には、あれこれと疑問が湧いては消えていった。はたして彼らは言葉を保存し伝承していくための博物館のようなものとして演劇を捉えているのだろうか。劇場は教育の場であるという考え方はヨーロッパでは珍し

くないが、それにしても正しい言語を伝える場として劇場を捉え、正しい言語を劇場に聞きに行くという状況がフィンランドでは成立しているのだろうか。あるいはフィンランドでは、正しい言語が劇場でしか味わえないということなのだろうか、と。

フィンランドの人々が言語に対して抱いている特別な思いについては、歴史的な背景を抜きにして理解することはできないだろう。十二世紀ごろからフィンランドはスウェーデンの影響下にあり、十四世紀以後は完全に支配下に置かれていた。したがって長い間、支配者層や知識階層の話す言葉はスウェーデン語であり、フィンランド語は庶民の言葉であった。

その後ナポレオン戦争の動乱期の中、フィンランドは一八〇九年にロシアの一部とされ、一九一七年の独立までロシアの支配下に置かれた。ただしそれは外交権を除く完全な自治を認めるという内容で、事実上フィンランドは独立国に近い地位を得た。そして一八二〇—四〇年代から、学校教育にフィンランド語が導入されている。

ところがニコライ一世（在位一八二五—五五）の代になりフィンランド語での出版を禁止するなどロシア化政策が打ち出された。その反動として一八三〇年代にフィンランド文学協会（一八三二年設立）をはじめ、自国の言語に根ざしたフィンランド愛国運動が強まることになった。フィンランド語で劇が書かれるようになったのも一八二〇年代以後のことである。一八五五年には、アレクサンドル二世（在位一八五五—八二）

によりフィンランド語での出版が回復されるが、次の皇帝ニコライ二世（在位一八九四—一九一七）の代で再び情勢は悪化、一九〇〇年に学校教育へロシア語の導入が強制され、フィンランドの自治権剥奪が進められることになった。

ようやくフィンランド語が正式な国語と認められたのは、ロシアから独立した後一九一九年のことで、フィンランド語とスウェーデン語が国語として認められた。

フィンランド大使館 (<http://www.finland.or.jp/ja/>) の公式サイトで、文学の項目に「フィンランドの書き言葉の文化は若く、およそ一五〇年前に、フィンランド人としてのアイデンティティーは書き言葉のフィンランド語にあると提起した、フィンランド語で書く文化の出現と共に始まりました。」と記されている通り、フィンランド語で書く文化の歴史は新しい。しかしだからこそ自国の言語が国の独自性を形成するという意識は、他のどの国よりも強く意識されてきたのだろう。彼らにとってフィンランド語が文学や劇場文化の中で息づくということは、言葉を守る以上の意味を持つている。

旅先で出会ったフィンランド人のほとんどは、流暢な英語を話し、他にも複数の言語を話すことができるという。その柔軟な多言語文化の様相とは対照的な姿が、演劇について語られた言葉の背後に見え隠れしていた。

* * *

残念ながらフィンランド語で書かれた劇の内容まで踏込む

は今の私には無い。それに今回の訪問では、八月ということもあり、日頃地元の人々が楽しんでいる劇場のレパートリーを見ることは叶わなかった。

代わりに、今回フィンランド演劇の資料のひとつとして渡されたフィンランド演劇情報センター (Finnish Theatre Information Centre) 発行の冊子から、すこし状況をたどってみたい。

A 6サイズで16ページの小冊子「統計で見るフィンランド演劇 (Finnish theatre in figures 2006)」には、一シーズンの観客動員数や劇場の演目数、労働人数ほか11項目について数字とグラフが示されている。

二〇〇四―二〇〇五年のシーズンで最も客を集めた演目ランキングを以下に示した。これを見ると一位から三位をフィンランドで書かれた演目が占めている。たとえば一位の演目は英訳タイトル I want everything-right now! (原語 MULLE KAIKKI HETI、すべてが欲しい、今すぐ)、これはレビュー形式のもので演出を担当しているハドヴィックはイギリス出身だが、一九六九年以降フィンランドの劇場やテレビ界でライター兼演出家として活躍する人物である。二位の演目は英訳 The Finnhorse (原語 SUOMEN HEVONEN、フィンランド馬) で、EUの片田舎の農村家族の生活を描いた悲喜劇である。上演されたコム劇場は、六〇年代後半に若手集団によって設立され、子供や若者、労働者、郊外に住む

人気の演目観客動員数トップ10

1.MULLE KAIKKI HETI (演出 Robert Neil Hardwick) Helsinki city theatre	45,849
2.SUOMEN HEVONEN (作・演出 :Sirku Peltola) KOM-teatteri	45,559
3.SURUTTOMAT (作 :Minna Canth 演出 :Peltola) TTT-Theatre of Tampere	40,618
4.WEST SIDE STORY (Bernstein-Laurents-Sondheim)	38,697
5.DON JUAN (Moliere)	35,513
6.MISS SAIGON (Boublil-schonberg)	35,256
7.ZORBAS (Joseph Stein – John Kander – Fred Ebb)	33,679
8.VIIMEINEN SIKARI (Ahlfors)	30,869
9.MAAMME NAURU (Komediateatteri Arena)	29,753
10.AMADEUS (Shaffer)	29,684

Finnish Theatre Information Centre のデータによる

人々などへ向けて活動をはじめた劇場の一つらしい。この作・演出のペルトラは三位の演目でも演出を手がける現代活躍中の女性劇作家兼演出家である。三位の演目は原作が十九世紀末の女性劇作家ミンナ・カント (Minna Canth, 1844-1897) の『労働者の妻 (TYÖMIHEHEN VAIMO, 英訳 The Workers Wife, 1885)』で、カントはイプセンやストリンドベリなどから影響を受け、社会における女性の立場を描いた作家として知られる。それをミュージカルバージョンに演出し、英訳タイトル The Carefree (原語 SURTUMAT, 心配ない) として上演したものらしい。

次いで四、五、六、十位に見られるように、海外の演目も人気が占めており、国内外問わず人気の作品の多くが、歌やダンスを含む内容であることが見て取れる。

言葉中心のドラマの他に、フィンランドではオペラやダンスの公演も多く、現在のフィンランドには公的な資金を受けている劇団数はダンスグループを含めて百を数える。国内には五十八の劇場があり、その内訳はフィンランド語の劇団が四十二、スウェーデン語の劇団が六、ダンスグループが十となっている。

* * *

世界現代演劇百科事典 (The World Encyclopedia of Contemporary Theatre: Europe) に記されたアンネリ・スール・クヤラ (Anneli Suur-Kujala) 氏の小史によれば、フィ

ンランド演劇にヨーロッパの影響が見られるようになるのは十八世紀後半のことで、スウェーデン、ドイツ、ロシアなどの演劇から影響を受けた。最初に一八六七年にスウェーデン語のプロ劇団が作られ、その後一八七二年のフィンランド語のプロ劇団も誕生し、フィンランド劇場 (Finnish Theatre, 原語 Suomalainen Teatteri) が設立された。これは今日のフィンランド国立劇場 (Finnish National Theatre, 原語 Suomen Kansallisteatteri, 1902) である。

十九世紀末から世紀転換期にかけては、他国の近代演劇の流れと同じく、マイニンゲン劇団の影響下にあり、次いでリアリズム演劇がフィンランド国立劇場などで上演された。一方、地方には労働者や若者で構成された劇団が作られ、それらの劇団



現在のフィンランド国立劇場外観

にはドイツ表現主義が強い影響を与えた。また一九六〇年代頃にはブレヒトの理論を背景に、演劇を通して社会へ影響を与えることを目的とした演劇も見られるようになる。

俳優訓練については、一九四五年当時で、フィンランドには国から援助を受けているプロ劇団が二十四あったが、その俳優のほとんどは正式な俳優訓練を受けた経験がなかったという。その頃フィンランド語の演劇学校は一つしかなく、スウェーデン語の俳優養成については劇団で訓練が行なわれていた。プロを目指す俳優の多くは、アマチュアの劇団で下積みしながらプロへの道を探るといのが一般的であった。

二十世紀のフィンランドの演劇学校設立の推移については以下のとおり。まずスウェーデン語の俳優養成は、スウェーデン劇場 (Swedish Theatre) に一九一〇年から一九七三年まで俳優学校があった。フィンランド国立劇場にも一九〇六年から一九二〇年まで俳優学校があったが、一九二〇年以後、フィンランド・ドラマ・スクール (Finnish School of Drama) が設立され、一九三九年まで続いた。

一九四三年になってフィンランド演劇学校 (Theatre School of Finland) が誕生し、十年後に演出家と舞台デザイナーの養成も開始されたが、その内、舞台デザイナーについては一九六二年に工業芸術アカデミー (Academy of Industrial Arts) へ移されている。フィンランド演劇学校の創設から二十年間、俳優指導は、徹底したスタニスラフスキ・システムに基づいたもの

だったという。

その後、プロの俳優育成機関の不足が深刻になり、一九六四年にタンペレ大学に演出と劇作の専攻が設置された後、六六年には演技専攻も作られた。また一九七三年にはフィンランド演劇学校が訓練センターを設立し、正規の訓練を受けていない演劇人に技術を学ぶ機会が与えられた。その期間は数日から十週間程度で、国内外から講師を呼び、俳優、演出家、劇作家、技術スタッフに関する短期講習が行なわれた。現在、高等教育機関としては、タンペレ大学とトゥルクにある芸術アカデミー、そしてフィンランド演劇学校の後身として大学レベルの学校となったフィンランド演劇アカデミーの三ヶ所に俳優養成のプログラムが置かれている。

* * *

ヘルシンキ滞在中にフィンランド演劇アカデミー (Theatre Academy of Finland、略称 Teak) を訪問した。郊外の工場跡を利用した校舎が印象的だった。中央に吹き抜けがあり、その周辺を囲むような口の字型の建物はこじんまりした佇まいである。

二〇〇四年に二十五周年を迎えたというこの学校は、一九七九年にフィンランド語とスウェーデン語で俳優教育を受けられる学校として開設された。八三年にダンス専攻、八六年に照明・音響デザイナー専攻、九六年にはダンスと演劇の教育専攻が設置されている。さらに九八年に演技の修士課程

二〇〇一年にはパフォーマンスと理論の修士課程が設置されている。先述した工場跡の校舎に移転したのは二〇〇一年のことである。

四年間で学ぶ内容は、フィンランド語とスウェーデン語のそれぞれの演技専攻をはじめ、演出、劇作、照明・音響、ダンスの専攻があり、修士課程では演技、ダンス、振付、教育指導、パフォーマンスと理論、について学ぶことができる。ちな

みに二〇〇五年の学生数は三六〇名、それとは別に大学院生が四十一名で、教員数は四十四名となっている。一学年が九十名程度の小規模な専門学校という印象である。教育内容は実践が中心で、アカデミーの教員たちは、現役の俳優や演出家でもあり、劇場と密接に関わっているという。

リハーサル室や稽古場、小道具収納庫、衣裳工房などを案内してもらった。吹き抜けになっている一階部分には、周囲に大きめのスタジオへの入り口がある。中には入れなかったが、スタジオの中で学生たちが作業をしている様子が見えた。見学させてもらったのは上の階で、学校の事務室や図書館、教室、研究室を初め、小さな体育館などもある。リハーサル室兼稽古場やピアノのある音楽室に続いて、小道具や衣裳の倉庫を見せ



フィンランド演劇アカデミーの校舎
工場跡地を改装したもの。1階吹き抜けの周囲に大きいスタジオへの入り口が見える。

てもらった。特に倉庫は想像していたよりも広く日常でも使用できそうなものから時代物、オリジナルの製作物まで、種類や色で分類され、棚に全部見えるように几帳面に並べられてあった。フィンランド演劇学校時代に培ったリアリズムの伝統を思えば、人物の性格や背景を描くのに重要になる小道具や衣裳が取り揃えられているのも頷けるような気がした。

* * *

最後に、ヘルシンキで唯一私が触れることのできたフィンランド語の上演について簡単にレポートしておきたい。それはこの演劇アカデミーの学生による不条理劇だった。上演されたのは、オッコ・レオ (Okko Leo) 作の『球技場 (The Playing Field, 原題 Kenta)』という作品で、書かれた年代や作家につ

いては情報がない。四月に初演したものを、学会員のために特別に再演したものである。

上演前に全編を英語訳したコピーをもらったが当日は眼を通す時間の無いまま開演を迎えた。簡単な要約として、「社会から取り残された全体主義的な人々を描写した政治的な悲劇」と説明されている。誰も

いない球技場で二人のグラウンドキーパーが練り広げる他愛のない会話は、時に地面に白線を引きながら、夢を語り、改革を叫ぶ。時には別の権威主義的な親方が会話の中で登場し、片方がその役を演じたりしながら、時間が過ぎていく。ふとベケットの『ゴドーを待ちながら』を思い起こさせる場面もあった。

演じるのは演技専攻の男子学生二人で、学内の上階にある小スペースで行なわれた。開演の時間になっても外で待たされ、なかなか開場せず、時々中から学生が覗いては「もう少し待ってください」と声をかけて行つた。ようやく開場して中に入ると、天井がそう高くは感じられない普通の教室程度の広さである。ブラックボックスになつており、音響ブースが奥の片隅に置かれている。その後ろに隣の部屋に続くとびらが一つあり、



写真はアカデミー内部
(上) 上階のリハーサル室兼稽古場
(下) 衣装倉庫、全体の広さはこの倍

どうやらそこがスタッフおよび役者の控え室に続いているらしい。中央におよそ四メートル四方の一段高くなった舞台が作られている。部屋の大きさは、四方の壁際に一列六脚ほど客席の椅子を並べれば、あとは舞台周辺を人が一人歩ける程度の広さである。室内はほとんど真つ暗で、十名ほど集まった観客が席に着くとすぐ舞台は始まつた。

中央の正方形の舞台には、赤いレンガが敷き詰められていて、縦横二本ずつ、レンガ一個分の幅の溝が平面を九等分に区切っている。印象的だったのは冒頭の場面で、照明が点くと室内はスモークで満たされているのが分かった。あとでキャストを記したチラシを見ると、小さく「注意…この演劇はたくさんスモークを使っています」と書かれてあつた。照明は、二方の壁から反対側の壁へ向けて縦長のライン状に二本づつ照射さ

れた。ちょうど舞台面に引かれた溝に沿って、光の壁が立ち上がっているように見える。つまり四ヶ所からの光源が、九等分された地面に合わせて光の壁で九つの部屋を作っている印象である。劇の内容にそって見れば、この照明は夜にグラウンドを照らす鋭いライトと、ラインが引かれたグラウンドのイメージを重ね合わせたものとも見えるが、霧のようなスモークの中に光で仕切れられ浮かび上がった九つの狭い空間は、それ以上のものを表現しているように見えた。人物は、その仕切られた空間をそれぞれ別々に手探りしながら、時には相手を探すようにして移動し、声を掛け合う。なにかを見失って探し物をする人々の像を印象付ける演出である。上演全体を通して照明の変化は多く、効果を意識したのようになっていたように思う。また音響についても夢と現実が交差するような場面では、照明に合わせ



写真はアカデミー小道具倉庫
所狭しと小道具が並んでいる。

てエコーや特殊な効果を使い、会話を際立たせる試みがなされておおり、いずれも小さな空間でありながら技術的に凝っている印象を受けた。ちなみに前述の冊子「統計で見るフィンランド演劇」では、フィンランドの劇場で働くスタッフの雇用者数の推移（一九九二―二〇〇五年）を職種別でグラフにして掲載している。舞台美術、演出家、音楽家、文芸部員、衣裳、ダンサー、照明・音響の項目が並ぶ中で、音響・照明デザイナーの雇用については一九九六年まで雇用数がゼロだったものが、翌年から徐々に数を増やし、二〇〇五年には二十名以上に伸びている。会話の内容は、分からないなりに、演技によって労働者風の薄汚れた服装の若い二人の男の性格が多少違っていて、一人は神経質でラインの歪みを几帳面に計りながら仕事をし、もう一人は服装や動きから荒くれ者であることが読み取れた。そして

彼らが、なにかうつろで実体感覚の乏しい世界の住人であることも伝わってきた。総じて演出も演技も、社会的なテーマに真摯に取り組んでいるという印象である。

熱演は一時間半ほど続いたが、さすがに言葉が理解できないまま見る不条理劇というのは時間が倍以上にも感じられた。舞台構成がある程度分かってくると観客の何人かは席を立った。結局最後には半分ほどになっていた。

* * *

言葉も含め舞台上に展開される音や色など様々な要素が放つ全体のリズムには、テーマやストーリーとは異なるいろいろな情報が含まれている。たとえばそれは、言葉が持つリズムであり息遣い、あるいは、言語に結びついて生成される感性と一言でもいいかもしれない。または、ちよつとした人物の仕草や癖にも現れる文化的背景などもある。海外の劇場に足を運んで得られる情報は、そういう意味でたくさんある。とはいっても、言語を重要な一要素とする演劇が常に抱える問題は、観客が同じ言語圏になれば十分にテーマを共有し、楽しむことができない点にあることも確かである。

今回フィンランド演劇との接触を通して、最も強く感じたことの一つは言語の問題である。自分の国の言葉で演劇を上演することは、マイナーな言語であればあるほど、問題を共有できる範囲を狭めているように思われる。それは国際社会の中で問題を共有し、コミュニケーションを豊かにすることは正反対

のようにも見える。しかしフィンランドの例を見ると、自国の言語で文化的な活動を行なうことが、国際社会の中で独立した国として立場を保つことと密接に結びついている。

たとえば演劇学校の劇作専攻では、劇作と同じぐらい翻訳の教育にも力を注いでいるという。フィンランド語で劇を書くだけでなく、フィンランド語の劇を英訳して国際的なステージへと発信する。つまりフィンランド語の演劇は、フィンランド語を話す人々のために書かれるだけではなく、国際社会の中に別の役割も担っている。